

淀川



淀川の概要

淀川は、琵琶湖に端を発して大阪湾に注ぐ全長75キロメートル、水位の高低差30メートル、流れは舟道に適し交通の動脈として言う迄もなく、大阪平野、市の中心を流れている堂々たる大河である。

三川を合流してその水系は度々の洪水や氾濫、堤防の決壊・付替、水路の開削などの変遷を辿り、そこに

暮す人々に大きな影響を与えてきた。国の歴史にも古くは継体天皇の頃の交通として、更に時代は下り、江戸～明治の初めにかけて都とのかかわり、更に商都「なにわ」に至る歩みである。(朝鮮通信使など・・・この一連の資料・記述は尼信の資料館、湖北の雨森芳洲庵等にくわしい)

“よどがわ”にかかわりある人物

大橋房太郎(1860年～1935年)

大阪府出身の政治家。大阪府を流れる淀川の治水に一生を捧げ、治水翁と呼ばれた。

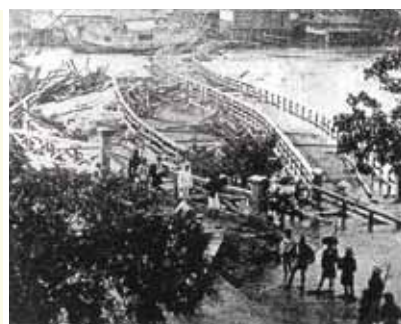


写真■大橋房太郎

- 万延 元年(1860) 大坂東成郡榎本村(現在の大阪市鶴見区)放出で庄屋の四男として生まれる
- 明治 16年(1883) 上京し法律家 鳩山和夫博士の書生となる
- 明治 18年(1885) 淀川大洪水発生により帰阪
- 明治 20年(1887) 放出村の戸長(村長のもと集落を治める行政官)に就任
- 明治 22年(1889) 榎本村の村長に就任
- 明治 24年(1891) 大阪府議会議員に当選
- 明治 29年(1896) 河川法制定、淀川改良工事着手
- 明治 42年(1909) 毛馬の閘門で、淀川改良工事竣工式開催、祝辞を述べる
- 大正 12年(1923) 内務大臣 後藤新平から「治水翁」の名を与えられる
- 昭和 10年(1935) 76歳で死去

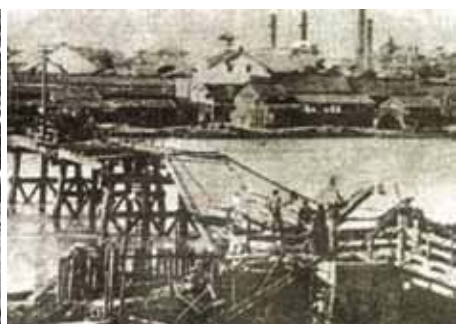


図■淀川改良工事完工図



写真■淀川決壊 安治川橋

写真提供：淀川河川事務所



写真■淀川決壊 天満橋

写真提供：淀川河川事務所

【治水事業の概要】

- ・土地買収：約916ヘクタール(甲子園球場の約215個分)
- ・地権地主：約3,000人
- ・工事期間：明治29年(1896)～明治43年(1910)
- ・総工費：約1,000万円(国家予算2億円の5% 現在の金額で2兆円)
- ・労働力：延べ800万人

太子橋あたり

大阪市立太子橋小学校が守口市域内にある

地下鉄太子橋今市駅の改札を出たところに案内地図がある。付近を正確に示したものが、その中で気になることがあった。大阪市立太子橋小学校がスッポリと守口市域内にあることだ。

旧国名では、守口は河内の国、大阪市は摂津の国だ

から市境は昔の国境でもある。何故こんな街の真ん中に国境線が通っているのだろうか。

また、私達太子橋地区の氏神様が、豊里大橋の向こう側の豊里鎮守 大宮であることも不思議でならなかった。

淀川の大改修～細長い太子橋の地形

淀川は八幡で桂川、宇治川、木津川の三河川が合流して大阪湾に注ぐ大河川である。この川の恵みで天下の台所といわれた大阪が育てられた。農業に飲料水に、そして舟運にまさに母なる大川である。

しかし川は恵みだけではなく、時には大洪水の災難をもたらす。有史以来の洪水記録では130回以上、平均10年に1回は被害を受けていることになる。このため古くは「日本書紀」の仁徳天皇11年冬の条に「以って茨田堤を築く」とあるように治水は大きな課題であった。

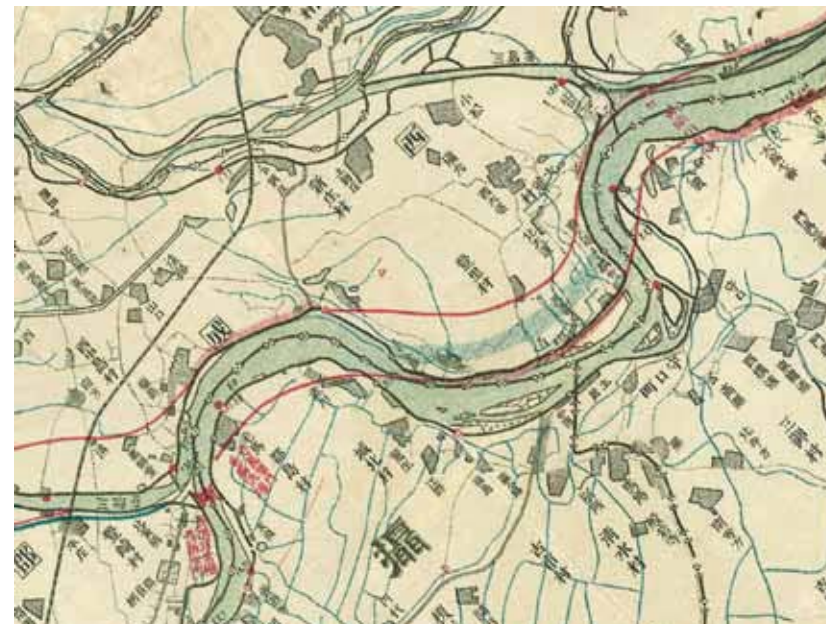
明治18年(1885)6月に、折から梅雨の長雨で大洪水が発生した。このことが契機となって、淀川の大改修が行われることになった。

明治30年(1897)の淀川改良工事計画図を見ると、

以前の淀川は守口付近で大きく湾曲している。そして毛馬付近を本流と中津川に分かれて大阪湾に向かって流れていた。明治29年(1896)から始められた河川工事では、流路の整備と毛馬からの放水路を作ることが行われた。外国人の技師に指導されながらの大工事であった。

計画図には、赤い線で計画後の淀川の流れが示されている。もともと淀川の右岸にあった、豊里村、平田地区が左岸に取り残され、川全体が北へ大きく移動したことが、この計画図から読みとれる。

川は北へ動いたけれど境界はそのまま残されたのである。大阪市旭区太子橋が細長く守口市域に入り込んでいるのはこのためである。



図■淀川改良工事計画図(部分)

資料提供：淀川河川事務所



図■現在の太子橋小学校周辺の地図